

『入試必携英作文 Write to the Point』の改訂にあたって

竹岡 広信

はじめに

入試必携英作文 *Write to the Point* (以下『必携英作文』) を平成 19 年に出してから既に 4 年の月日が流れました。幸い、数多くの先生方のご支持を頂き、現在に至りましたこと、まずこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

特に、「解答、解説が詳しく授業がしやすい」というご意見は、大変ありがたく思いました。

出版のときには「完璧に作った」と思って世に出したのですが、この 4 年間、自分でも実際に授業を使って検証した結果、まだまだ改善の余地があることがわかりました。そんな折、数研出版の編集部から改訂の打診がありましたので、まさに「渡りに船」。改訂をすることになりました。

今回の改訂の目玉ポイント

1. 生徒の目線にさらに近づける！

先生からのご意見 1

別解として紹介されているほうが生徒にとっては書けそうな解答例であるため、こちらを解答例とし、現在の解答例を別解の扱いとしてほしい。

先生からのご意見 2

解答がきれいすぎる。詳解も含め、生徒が書きそうな直訳型の解答をもう少し載せてほしい。

旧版を作成する際、ある程度は生徒に問題を解いてもらい、その解答の分析結果を元に、問題選定を行ったのですが、不十分だったようです。この 4 年間で、もう一度すべての問題を生徒に解いてもらい、すべて私とイギリス人で添削し、それをまとめ、じっくり時間をかけて、その答案を再度 1 つずつ分析しました。その結果、お示しのように「生徒目線の解答」が「模範解答」になっていない場合も散見されました。もちろん、「範を垂れる」ために、敢え

てそのようにしたものもありますが、美しい答えは「教師の自己満足」になってしまいがちです。よって、旧版よりさらに「生徒の目線に近づけた解答」になるように改訂しました。もちろん、不自然なものは排除しています。

先生からのご意見 3

解答編の解答例について「この書き方ではダメだ」と書きすぎていると思うところがある。入試で確実に点数を取るためには必ず○をもらえるものを覚えておくのがよいのだろうが、生徒が書いてきた解答を、まちがっているわけでもないのに×とするのは気が引ける。説明にページを割くことになるだろうが、更なる詳しい解答編を希望する。

「せっかく原則を使ってきちんと書いたのに、×にされた」と生徒が悲しがる問題もありました。日本語との論理の違いを教授するために、敢えて採用したものがほとんどでしたが、生徒にとっては「ずるいワナ」と感じられるようでした。

例 1 ジェーンは飼っている猫が彼女の言うことを理解しているかのように話しかける。

(第 12 章：仮定・条件の応用)

この問題で満点の生徒は皆無でした。英語の論理を考えれば「彼女の言うことを理解していると彼女が考えているように」と補う必要があるわけですが、つまり、Jane speaks to her cat as if she thought it could understand what she is saying. が解答ですが、相当英語ができる生徒(大手の予備校の模擬試験で英語が全国 100 位以内)でもできませんでした。このような問題は差し替えることにしました。

例2 5月5日から6日まで、あなたが京都に滞在されると聞いて喜んでおります。

(第6章：時制(2))

この問題も正解者は皆無。「5月5日から6日まで」は、ほぼ全員が stay in Kyoto from May fifth to sixth としていました(正しくは stay in Kyoto on May fifth)。学習効果をねらっての出題とはいえ、生徒全員がまちがえとなると問題です。かといって、その箇所(注)をつけると簡単になりすぎるので、差し替えとしました。

例3 日本では急速な高齢化が進んでいます。

(第1章：主語の決定(1))

ねらいは Japanese society is aging という慣用表現を習得するだけではなく、その表現を知らなくても There are more and more elderly people in Japan. などと書くこともできるよ、ということを教えることだったのですが、(注)に age「高齢化が進む」と入れたこともあって、ほとんどの生徒が、Japanese people are aging.... More and more Japanese people are aging. と書いてしまいました。age という(注)を外した場合も試してみましたが、それほど効果はありませんでした。これでは、「練習問題」の意味をなさないと判断し、この問題を外すことにしました。

逆に生徒のミスがほとんど出ない問題も外すことにしました。

例4 予想していたよりも時間がかかったが、我々は何とか合意に達することができた。

(第13章：比較の基本)

reach an agreement を(注)にしたためか、まちがえる生徒がほとんどいませんでした。よって、教育効果は薄いと判断して外すことにしました。

2. 細かい点も再チェック

例5 今はとても手が離せないので、10分後にも電話をかけ直していただけますか。

(第4章：理由の表現)

この問題では「理由の表現」でつまずく生徒はほとんどいませんでしたが、「いただけませんか」

という丁寧な日本語にもかかわらず、please とか Will you ~? という形を使った生徒がかなりいました。過去に東京大学や神戸大学の英作文の問題で「丁寧な英語を用いて英作せよ」という指示が出されたことがあります。そもそも「丁寧な言い方で人にものを頼む」というのは、日常生活において不可欠なことです。このようなところも少なくとも解答編でもっと強調しなければならないと感じました。

例6 子どもは、発見をしたり、新しいことを知ったりすると、本当にうれしそうです。

(第4章：理由の表現)

この問題のねらいは、be 動詞 [get] + 感情を表す形容詞の後の理由の提示を定着させることです。採点していると、その部分で生徒はつまづくことなく、to (V) あるいは when S V と処理していました。ところが、予想どおり「知ったり」の部分に、know ~「～を知っている」を使ってしまう生徒が多いため、この部分の解説を増やすことにしました。

また、「新しいこと」も a new thing(正しくは new things あるいは something new)とした答案が散見されました。これも加筆することにしました。

例7 いまの傾向が続くと今後30年足らずのうちに、65歳以上の人が4人に1人を占める。

(第9章：数字)

まずは「続く」という箇所 last が多く出てきました。last は、必ず last + 期間という形で使われ、しばしば「どれくらい長もちするか」という場面で使われるためここでは不適です。

また、「占める」という日本語に対して、occupy も散見されました。「～が(数字)を占める」は、～account for(数字)が一般的で、occupy「(時間・空間・領土)を占有する」は使えません。

あと、in less than thirty years from now(in から from now が不要)、in about thirty years などのミスなども出てきました。

以上のことを解説に加筆することになりました。

例 8 何かすてきなことが起こらないかしら。
(第 12 章：仮定・条件の応用)

この問題は I wish の基本問題として出題したのですが、「起こる」の時制でまちがえた生徒が非常に多いことが判明しました。つまり、模範解答は I wish something good would happen to me (hope を使うことも可能です) だったのですが、生徒たちは I wish の後に S would V の形が置かれることに慣れていないためか、また日本語の「起こる」が未来であることがわかっていないためか、I wish something good happened to me 「私によいことが毎日習慣的に起きればいいのに」としてしまいました。よって、詳解をさらに拡充させ、模範解答でも注意を促すことにしました。

3. 自由英作文の全面的な見直し

先生からのご意見 4

自由英作文の模範解答を受験対策用に直してほしい。今の解答はネイティブの先生が楽しんで解答を作成しているという印象を受ける。

自由英作文は、全面的に改訂することにしました。そのため、もう一度すべての問題を、生徒に解いてもらって、それをすべてイギリス人の目から添削し、1. 語彙、構文面での頻出するミス 2. 内容面での頻出するミス を再度チェックしました。模範解答も「生徒の目線からのもの」を追加することにしました。ただし、問題自体は、今後も頻出しそうな問題については残しました。

例 9 「大都市で暮らすより小さな町で暮らすほうがより快適だ」という意見に対するあなたの意見を 50 語前後の英語で述べなさい。〔滋賀大〕
(第 13 章：比較の基本)

たとえば、この英作文で頻出するミスは、a city と a town の使い分けでした。「小さな町」を a small city とした生徒が多数いました。city は、large であろうが small であろうが「都会」に変わりなく、もし a large city と a small city を比較すると、問題文とは異なる論理展開(大規模の都会と小規模の都会との差)が必要とされます。

また、「小さな町」の利点として「静かである」

を挙げた生徒が非常に多いのですが、まちがって silent 「(聖夜のように)静まりかえった」を使ってしまった生徒が相当数いました(正しくは quiet)。

あとは、life in a small town とすべきところを、the をつけて the life in a small town とするミスも散見されました。こうしたことを、新版の解説には追加することにしました。

「頻出テーマ」は、過去 15 年ほどの全大学での出題を分析して提示していますが、この 4 年間で随分と変わったという印象は受けません。「携帯電話の是非」は本当にあちこちの大学で出題されていますが、昨今では「小学生の携帯電話所有の是非」などに変化してきています。それに、昔はあまり見られなかった「食育」にかかわる問題が増えました。

「ふつうの英作文」が得意な生徒は、「自由英作文」も得意です。ですから、まずは定型英作文を通して、ある程度「書くための道具」を身につけさせる必要があります。それを行った上で、「自由英作文」を添削指導すると効果があります。

4. 新たに発展編を設け、高難度の長文英作文を提示
最新の入試問題の中から、比較的難しい問題を選び、「腕試し」用に掲載しました。

難度の高い入試問題を扱うメリットは、「いかにして定型に持ち込むか」を訓練することにあります。

例 10 悪天候や自然災害によって、飛行機が欠航し、海外での滞在を延ばさなければならないことはさほど珍しいことではない。〔京都大〕
(改訂版：発展編の問題の一部抜粋)

たとえば、この問題の「海外での滞在を延ばす」は「得意な生徒と苦手な生徒」の差がつくところです。「苦手な生徒」は、「を延ばす」=「を延期する」と考え、put off あるいは postpone を考え、さらに「海外での滞在」は staying abroad とします。そして、それらを足してしまうわけです。ところがそれでは、よく意味がわからない文になり、敢えて解釈すれば「滞在(の最初の日?)を延期する」という意味になってしまうわけです。put off や postpone を使うなら、目的語には one's departure や one's return を使う必要があります。stay を使うなら、extend one's stay とする必要があります。

「得意な生徒」は、上で述べた組み合わせの「危険性を察知」して、方針そのものを変え stay abroad longer than you planned などとします。

このような訓練はある程度難しい日本語でやったほうが効果が上がります。応用編はそのために作りました。

5. 英作文に対する熱い思い

私は、「英語教育をよくしたい!」という思いで、様々な本を執筆してきました。執筆の際には、必ず「自分が若いころ、こんな本があればいいのと思う本を書こう」と思っています。『必携英作文』も例外ではありません。

もう20数年も昔、英作文をうまく教えることができずに本当に辛い思いをしました。今でも、忘れられないのが、某英作文問題集に載っていた次のような問題です。

昨日、私たちは4時間も環境問題を話し合った。

今から考えれば何でもない問題なのですが、その当時は授業の前に、次の問題にぶつかりました。

1. 「話し合う」discussed か、talked about か?
2. 「環境問題」に the がつくのかつかないのか?
3. 「問題」は単数形か複数形か?

その当時、力不足であった私は、自力で解決することができませんでした。今なら、「状況が明確ではないので、解答が複数あるよ」なんてサラッと言うことができますが、そんなこと思いつきもしませんでした。もちろん、今のように、様々な英米人に尋ねるといふ発想もなく、当然インターネットのグーグルや電子辞書を用いた検索などが存在する時代でもなく、途方に暮れてしまいました。その問題集の「解答編」を見ても、ただ「模範解答」が2, 3挙げられているだけで、解説はなし。しかも、その「模範解答」さえ、英語として自然なものかどうかさえ怪しい。辛かったですね。

さらに、その当時、全員の答案を添削指導するなんて考えられませんでした。「採点」=「苦痛」でした。今から考えれば、採点するだけの力がなかったため、膨大な時間がかかってしまうことが最大の原因だったと思います。授業は、質問形式だったのですが、「質問するだけの厚かましさ」をもった生徒は少なく、おそらく多くの生徒が、「模範解答」

とまったく違う自分の答えを、ただ×にするだけだったと思います。私が学生時代に経験した「面白くない英作文」と同じことをしていたわけですね。

それから20数年、以前よりは少しは知恵もつきました。学校にはきっと昔の私のように悩みを抱えておられる先生方がいらっしゃるはずですが、そのような先生方に「こんな解説がほしかった」というものを提供することが何よりの喜びと考えています。

おわりに

私は春、夏、冬に、先生方を対象に「教員セミナー(駿台予備学校主催)」の授業をしています。授業の合間の休み時間に『必携英作文』に関する質問を受ける機会が随分と増えました。「うちの学校の生徒の答案で多いのは、〇〇ですが、なぜ解説では扱っておられないのですか」、「この和文を〇〇に解釈することについて、先生はどうお考えですか」、「私はこの問題の状況例を〇〇のように伝えていますが、先生はどう思われますか」など、先生方の熱心さにはこちらもたじたじです。本当にありがたいことだと思っています。『必携英作文』は、こうした全国の学校の先生方の声をできるだけ反映させたものにしたいと切望しています。ですから、ちょっとしたご意見でも、編集部を通じて是非お聞かせ願えれば幸いです。この本を通じて「英作文は面白い」と多くの生徒たちが言ってくれることを願っています。

(駿台予備学校講師・洛南高等学校講師・竹岡塾主宰)